九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジウリアの恋 : スタンダール『社会的地位』の創作をめぐって

高木, 信宏

https://doi.org/10.15017/9970

出版情報：Stella. 15, pp.109-123, 1996-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジウリアとの恋

―― スタンダール『社会的地位』の創作をめぐって ――

髙　木　信　宏

すでにわれわれはべつの場所で『エゴチスムの回想』と『社会的地位』の執筆の動機や背景を論じてきた[1)]。これら1832年にあいついで書かれた未完の作品は，チヴィタ＝ヴェッキア駐在フランス領事としての生活のなかでスタンダールが本格的な執筆活動にむかう端緒となった試みと位置づけられる。前者は自己認識を目的とした回想であり，後者は自らのごく最近の体験を題材にした小説であるため，もちろん記述のスタイルや対象となる人生の時期といった相違が両者のあいだにはみられるが，しかしいずれにおいても自分を見つめなおす作業を土台にしている点ではかわりなく，それぞれがまったく偶発的な仕事というよりも，ひとつの文脈のなかでとらえられるべき側面をもっているように思われた。その検討を，2作品における作家自身の性格の個別性と「恋愛」という主題とのむすびつきに着目してすすめてきたが，本稿ではこれまでの考察を補足する意味で，当時の作家のじっさいの女性関係に照明をあててみたい。

*

ジウリア・リニエリ・デ＝ロッキ。このイタリア，シエナ出身の女性がスタンダールと深い関係をむすぶのは，セルジュ・アンドレ本『ローマ散策』の余白に「I see Sien[ne]」と記される1830年1月9日以降のことである[2)]。これ以前の交際については，2人の最初の出会いが1826年11月10日から翌年の1月12日のあいだ，すなわち後見人のトスカナ大公国公使ダニエッロ・ベルリンギエーリにともなわれて彼女がパリを訪れてまだ間もない頃であることや，1826年6月に起こったクレマンチーヌ・キュリアル夫人との恋の破局に

よるスタンダールの心の傷が，ジウリアへ言いよることでいくぶんか癒されたといったことなどのほかは，およそ3年間にわたり詳細は不明である[3]。

1830年1月21日，および作家の47歳の誕生日である1月23日付のメモに，ジウリアから歓待されて驚きとまどうことばが現れるが，このときまで2人はさほど親密な関係にはなかったのだろう[4]。5日後の28日，スタンダールはジウリアから愛の告白をうけたことをつぎのように書きのこしている——

> なんということだ。47歳になった4日後に，若い女性が「あなたを愛しています」と言うとは。28日にこのことを書いているときでさえ喜びよりも驚きの方がまさっている。〔…〕このときは，……の告白は想像力をかきたてるものだった。だが，冷静さのおかげでうまい返事ができた。
>
> 「2カ月後，確信がもてたときに，あなたを愛します。」
>
> もうしぶんのない戦略。しかしこれは〔4〕7歳で初めてド〔ミニ〕ックにできたことだ。[5]

1827年のばあいとは反対に，こんどはジウリアの方がスタンダールにたいして積極的だったことが窺い知れる。さらに，2人の仲が進展したと思われる3月22日，『ローマ散策』の余白に「1830, 22 mars, a time, a first time」というメモが記される[6]。今日この短い記述はジウリアが初めて身を任せた日と解されている。ジウリアの告白から2カ月近い日にちが経過しているのは，作家が自身の戦略に忠実であったからなのだろうか。

残念なことに2人の恋愛の詳細をつたえる資料が当時の書簡やメモなどのかたちでは見つかっていないが[7]，この経験は『赤と黒』第2部のジュリヤン・ソレルとマチルド・ド・ラ・モールの恋のうちに結実したとされている[8]。同年の11月6日，トリエステ駐在フランス領事としてパリを発つ日，スタンダールはジウリアとの結婚の承諾を求めて後見人のベルリンギエーリに手紙をだす。たいする返答はほどなくトリエステに届くが，11月7日の日付をもつその手紙の文面は婉曲な拒絶であった[9]。しかし，これはジウリア自身の意思にもとづくものとは考えにくい。というのも，2年後にかかれたメモによると，ジウリア本人から「結婚」解消を告げられた時期を翌1831年4月26日前後としているからである[10]。じっさいには2人の親密な関係は，作家がパリを発ってしばらくは水面下でつづいていたのだろう。

どのような理由でジウリアが結婚の約束を破棄したのかを知る術もないが，彼女の通告は新任の外交官にすくなからぬ失望感をもたらしたと思われる。オーストリアの首相メッテルニヒにより政治的危険人物としてトリエステの領事認可状を拒否され，結局ローマの外港チヴィタ＝ヴェッキアの領事におさまったスタンダールは，1831年4月17日から当地にきていた。ジウリアの手紙が届いたのは赴任後まもない頃であり，ただでさえ退屈このうえない港町での新生活はいっそう耐え難いものになったはずだ。しかも悪いことは重なるもので悪性の熱病を2カ月にわたり患ってしまう。このようにみると作家が病の回復後そうそうにローマに転居し，以後生活の大半をローマでおくるのもじゅうぶん理解できる行動であろう[11]。さて，その後の彼女との交際はどのようなものであったのか。ジウリア宛の書簡などが散逸してしまっており今なお不明な点が多いが[12]，以下1832年に書かれる『エゴチスムの回想』『社会的地位』執筆前後の2人の関係の粗描をこころみたい。

アンリ・マルチノが推測したように，スタンダールは「秘密の結婚」の解消後すぐにジウリアへの思いを失ったりはしなかったであろう[13]。チヴィタ＝ヴェッキアに赴任した年の8月11日よりおよそ6日間[14]，作家はジウリアの故郷シエナに滞在する。同地で毎年8月15，16日におこなわれるパリオの祭りでの偶然の再会が目的であろうか。祭りの前日，シルヴィオ・ペリコの『未刊行悲劇』の表紙に「14 August, in Sienne war」という謎めいたメモがのこされているが[15]，しかし前後の状況からみてこれがただちにジウリアとの再会を意味するとは考えにくい[16]。パリオの祭りが終了するや，スタンダールはフィレンツェを訪れる。滞在中，現地の友人たちとの歓談やヴィウスーの図書室での読書がもっぱらの日課であった[17]。興味深いことに作家は翌年の同時期にもほぼ同じ旅程をたどっている。この要注意人物の行動はトスカーナ大公国の警察によって記録されているが，ジウリアと接触した形跡はない[18]。

「秘密の結婚」解消以後，2人のあいだで大きな展開がみられるのは1832年11月から1833年6月にかけてである。1832年10月初旬，ベルリンギエーリとジウリアが養子縁組をむすぶためにパリからフィレンツェにやってくる。スタンダールはいったいいつ頃どのようにして彼女のイタリア帰国の報に接したのだろうか。9月25日，スタンダールはフランスに一時帰省するための賜暇を申請している。許可がおりたのが10月16日。結局ジウリアにあうためにこ

れをすぐには利用しなかった点から考えると，とうぜん賜暇の申請より以前に彼女の動向を知ることはなかったはずだ。また10月7日から20日まで，作家はアブルッツォ地方を旅行しているが[19]，これはそのころ専心していた『社会的地位』の取材をかねていたのであろうか[20]。この未完に終わった小説は『赤と黒』以来やむなく遠ざかっていた創作の喜びを作家にもたらした。出発にあたり草稿の余白には短い遺書がしたためられ，拳銃が購入される。ところで，旅行中スタンダールが「Little」とよぶ娘に会ったことが，『社会的地位』の草稿の余白にのこされた10月28日付のメモなどからわかっている[21]。イヴ・デゥ・パルクは彼女を作家がリエチに訪ねたポテンツィアーニ家の娘と推測しているが，ポテンツィアーニ家との関係をふくめていまだに多くは謎につつまれたままである[22]。とはいえ，その存在はけっして無視しえるものではなく，当時2人のあいだで結婚が問題となった形跡がある。ヴィクトル・デル・リットはプレイアッド版の『日記』の註で，スタンダールは「結婚の申し込みを受けたが断固として拒絶した」と推測しているが，おそらく事情はその通りであったと思われる[23]。

この移動の多い小旅行のあいだ，とうぜんローマやチヴィタ＝ヴェッキアからの連絡は不通だったであろうし，またジウリアのことを知っていたのならスタンダールは「Little」を問題にしたりはしなかったと推測されるので，ジウリアについての情報に接したのは旅からかえってからではないだろうか。11月2日付のリジマック・タヴェルニエの手紙のなかでトスカーナにいく馬車の手配が語られている点と考えあわせると[24]，おそらく10月の末に思いがけないかたちで彼女の近況を知ったものと思われる[25]。

ジウリアに再会すべくローマをたったスタンダールは，11月7日オルベテッロ経由でシエナに到着する。このときも当地の警察は行動を密かに監視し，記録した。それによると，ベルリンギエーリ邸を頻繁に訪れ，またアントニオ・リニエリ・デ＝ロッキ（ジウリアの父）やその息子たちとたびたび会っていたことが報告されているが[26]，とうぜんながらそのなかには彼女も含まれていよう。途中11月20日から27日にかけてフィレンツェに滞在した後ふたたびシエナに戻り，ローマへの帰途についたのは12月2日。つまり17日間前後シエナで過ごした計算になるが，この間にあったジウリアとの経緯にかんして，まず12月13日モンテーニュ『エセー』第3巻にのこされたメモをみてみ

ると——

1832年11月。
シ〔エナ〕の全戦闘。〔…〕
1832年11月9日から12月2日まで。ヴィウスー〔の図書室で〕手紙を読んだ後弁護士に見られてしまった表情，なにもかもおしまいだ。ヴィ〔ニャノ〕での日々，11月30日から12月1日にかけての夜，打あけ話〔…〕すべておしまいだ。
12月13日に目にした手紙，17時頃フィレンツェにむかう途中，わたしは確信していた。[27]

同じ13日にジウリアから届いた12月5日付の書簡読了後，このメモは書かれたと思われるが，彼女の手紙が2人の関係の終わりを否定する内容であったにもかかわらずスタンダールの見方は悲観的である[28]。となると，2日後に彼女を忘れてしまいたいという旨の返信をだしたのは，ジウリアの本心をためす目的だったにちがいない[29]。だが，この手紙に彼女はすぐには答えなかった。そのため，翌年の1月10日付のフィールディング『トム・ジョーンズ』の余白メモでは，彼女の沈黙の理由をめぐって15の可能性が挙げられることになる。おかげで今日「シエナの全戦闘」の経緯がおおよそはあきらかになったといえるのだが[30]，気になる点がないわけではない。「なにもかもおしまいだ」ということばがここでもあらわれているが，問題はその真意である。「弁護士の面前でよまれた手紙」の発信者と内容が実証的な解明をみないかぎり，それらが置かれた文脈には今後も謎がのこることになるだろうが，以下われわれの仮説をのべておこう。1月10日のメモはつぎのようにはじまっている——

今日現在のきわめて不吉な沈黙。
数年後わたしがもっともよく思い出すであろう事実は，つぎのものだ。
フィレンツェで弁護士の面前で読まれた手紙によって。
ヴィニャノで，なにもかもおしまいになった。
この情事でよかったことといえば，ドミ〔ニック〕が仰天したということだ。
フ〔ィレンツェ〕にむかった日には，すべてもうしぶんなく終わっていた。さらにもう一度，12月5日付の手紙が立証しているヴィ〔ニャノ〕での歓喜のあとで，11月30日から12月1日にかけての夜に，〔フラカセッチとの〕結婚という，おこりうる最悪のかたちですべてはおしまいになった，
12月13日までに，なにもかもおしまいになったのだと思う。[31]

まず問題の「手紙」は，すでに引いた前年の12月13日のメモ，およびモンテーニュ『エセー』第3巻にしるされた「目。ヴィウスーの図書室，1832年11月。アドラストによって見られた」というメモと照合すると[32]，フィレンツェの友人ヴィウスーの図書室で読まれたものと考えられる。したがってここでの「弁護士」はヴィンチェンツォ・サルヴァニョリ。おそらく手紙の内容を読み，表情，とりわけまなざしに動揺が露顕してしまったということなのだろう。1833年3月18日付のメモでは「うつろな目（yeux morts），こわばった表情（fisionomia seca）」というより具体的なヴァリアントを見ることができる[33]。シエナからフィレンツェに移動する前の段階では，おそらくスタンダールは再会したジウリアとの今後の関係に希望をもっていた。手紙の内容はその希望を曇らせるものだったにちがいない。ミシェル・クルーゼは，ジウリアが自分の結婚の可能性を相手の名前は伏せて手紙で伝えたのではないかと示唆しているが[34]，あながち否定はできない。だが，ジュゼッペ・フラカセッチはジウリアの旧来の友人であると同時に，リニエリ・デ＝ロッキ家にとっても身内の人間である[35]。当時，周囲の誰からも婚約者としてふさわしい人物と目されていたとしたら，結婚の噂はジウリア以外から伝わった可能性もやはり考慮しておくべきだろう。また，クルーゼは11月20日から27日にかけてのシエナ滞在の背景にジウリアの策をみているが[36]，反対に作家のしかけた駆け引きであったことも考えられうる。いずれにせよ，手紙に驚いたスタンダールはシエナにもどりヴィニャノにあるベルリンギエーリの別荘を尋ねるのだが，そこで待っていたのは案に相違してジウリアの歓待，「ヴィニャノの歓喜」であった。彼女は結婚の噂を，あるいは自ら手紙で示唆した縁談を否定したのであろうか。しかし，結局は隠しとおせずにフラカセッチとの結婚の話を11月30日の深夜に打ち明けたということなのだろうか。

重要なのは，その夜の出来事について，「なにもかもだめになった」とスタンダールが書いたのが12月13日であるという点だ。なぜならば，ジウリアからフラカセッチとの縁談が白紙に戻ったことを知らされたのは12月5日付の手紙だとその前後の状況から推測されるが，それを作家がうけとったのが12月13日にほかならないからである。つまり，すくなくとも彼女がフラカセッチを愛しているのかどうかは作家にとって重要ではなく，自分以外の人間が結婚相手に選ばれたことこそ問題になっているといえるのだ。当時ジウリアは正

式にベルリンギエーリの養女となったばかりであったが，帰国の目的はそればかりではなく，なにか差し迫った必要のために適当な配偶者を探して入籍しなければならなかったのではなかろうか。フラカセッチとの話がこわれたあと，1833年3月23日にはじめて会ったジウリオ・マルチニと3カ月後に結婚するというジウリアの行動を見ると，そのように考えてもけっして不当ではあるまい。作家はシエナ滞在中に彼女のおかれていた状況を知ったはずだ。おそらくは，「弁護士の面前でよまれた手紙」こそ，彼女のもうひとつの帰国の目的を伝えるものだったと思われる。そのうえスタンダールは，愛なき結婚を遂行できる彼女の意志の強さ，『赤と黒』の女主人公マチルド・ド・ラ・モールのモデルにふさわしいその性格も充分すぎるぐらい知っているのである。だとすれば，ヴィニャノ滞在中にジウリアとの結婚が真剣に考えられ，11月30日の深夜に彼女への求婚がなされた，そう推測することもできるのではあるまいか。その結果，フラカセッチとの縁談の打ち明けというはこびになったのだろう。われわれは，「なにもかもだめになった」ということばの意味をこのような文脈で考える。興味深いことに『赤と黒』第2部第35章では，「なにもかもおしまいです（tout est perdu)」ということばがマチルドの手紙のなかで3度つかわれているが，その背景はやはり「結婚」が白紙になるという状況だったことを強調しておこう。

1月17日になってようやくスタンダールのもとにジウリアから手紙がとどく。内容の詳細は不明だが，ミシェル・クルーゼが推測するように[37]，これを読んだ作家は彼女の沈黙の背景に10日のメモであげた15番目の理由を見たのだろう。1月23日，謝肉祭のはじまったシエナに作家は姿を見せる。このときは翌月の12日までの滞在であったが，しかしふたたび「ヴィニャノの歓喜」は2人のあいだにおとずれなかった。ジウリア宛の4月20日付の手紙に書かかれているように，もう彼女が心を割って話をすることはなかったのである。スタンダールは落胆してシエナを後にしたはずだが，さらに追い打ちをかけるかのように，ふたたび彼女からの音信が途絶えてしまう。3月14日付の『トム・ジョーンズ』の折り丁メモ——

悲劇的な物語をたいへん楽しみながら読んでいる。いつの日かこれらの話を本にすることにしよう。これは気を紛らわせてくれる。わたしは恋の深みにはまっているよ

うだし，こんどの沈黙には心がみだされてしまうので，なんとか気がはれるようにつとめよう。[38]

ついで3月18日には「あらたな沈黙」という書き出しの後一文おいて[39]，さきに引用した1832年12月13日と1833年1月10日のメモのヴァリアントがあらわれる。ジウリアの心が読めず，現在自分のおかれた状況を確かめようと「ヴィニャノの歓喜」前後の記憶をたどりなおしたのだと思われるが，第3者を婚約者として知らされた事実によって，言外のうちにしめされた彼女の意向を，やはり否定的なものと考えざるをえなかったのだろう。4月8日，ようやくジウリアから手紙がとどく。文面は彼女の新しい交際相手，ジウリオ・マルチニの存在をほのめかしているが，とくにそれに続くくだりに注目したい——

あなたがシエナを発ってから，〔カルロ・ビアンキよりも〕もっと優しくて愛しい方と知りあいになりました。その方はもし長いあいだ交際しているのであれば，わたしにとって危険なひとになることもあるような感じはします。しかし一方では，わたしは幸せになるようには生まれついておらず，またいかなるときにも幸福になることはないように思われるのです。[40]

彼女はジウリオを本気で愛していないことを伝えている。「いかなるときにも幸福になることはない」というのは，たとえジウリオと結婚したとしてもという含みがあろう。ここでも彼女に結婚を強いる背後関係があることが窺い知れる。もちろん，そのことを知っているスタンダールは手紙の文脈を読み誤ることはなかった。翌日書かれた返事の投函は4月20日までのばされるのだが，投函と同じ日『恋愛論』の余白に「ピエトラ・サンタの致命的な手紙（the fatal letter）に答える」というメモがのこされているからだ[41]。ジウリア宛の返信のなかで作家は，「もはやなんの意味もなくなった1枚の紙」を同封して返すと書いているが[42]，やはり結婚にかんして2人がとりかわしていた約束のようなものなのか。あるいは，前年12月5日にジウリアが作家に希望をもたせるために書いた手紙ということもありうる。それはさておき，さきほど引用した彼女の手紙の文面にスタンダールが答えている箇所を読んでおこう——

なぜご自分が不幸になるなどとおっしゃるのですか。唯一不幸といえるのは，退屈

な生活をおくることです。あなたのご機嫌をそこねたいわけではありませんが，わたしがどれほどあなたを慕っているかご存じでしょうから，わたしが感じたことを申しますと，あなたがこの2年来おくられている生活は概して退屈なものではありますまいか。より好ましい状態があるといったところで，それは35歳のご婦人の生活です。あなたにはそうした分別くさい年頃になる前に，まだずいぶんと楽しめる年月がおありですね。ですが，あなたにはヴィニャノの男のような夫こそ必要なのです。[43]

「分別くさい年頃になる前」にはまだ間があるという箇所は，当時32歳であったジウリアにしてみれば，お世辞とも皮肉ともとれる両義的な表現に読めたであろう。ミシェル・クルーゼが考えるように，「ヴィニャノの男」が作家自身を意味するのであれば，スタンダールは自分と結婚すれば退屈はさせないのにと未練と抗議をまじえて言っていることになる[44]。

4月26日『イタリア年代記』の古写本の余白で，「2年前にはすべて終わったように思えたが，しかしそれからいい時期もあった」とジウリアとの関係が回顧的に締めくくられることになる[45]。この時点で事実上「シエナの全戦闘」以来，作家がいだいたと思われる結婚の希望に終止符がうたれたとみなせよう——もちろんジウリアの結婚以後2人の関係は新たな展開をみせることになるのだが，それは拙論の射程外としておく。

*

以上の考察をもとに推測すると，1832年6月から7月にかけて『エゴチスムの回想』の執筆が試みられたときに，スタンダールはジウリアとの関係をなかば諦めていたとほぼまちがいなくいえるだろう。執筆開始時に作家がおかれていた悲観的な心境を補足的に説明するならば，最後に引用した1833年4月20日付の書簡の文面とはうらはらに，1831年4月の「秘密の結婚」解消以来倦怠にみちた生活をおくっていたのはむしろスタンダールの方にほかならなかったのである。また，それは同時に自らの「老い」について作家の自覚がつよまった時期でもあったが，そもそも2人の恋の挿話のなかでは「老い」の不安をとりのぞいてくれたのがジウリアであっただけに[46]，「秘密の結婚」の解消を作家にふたたび「老い」の問題を意識させた要因のひとつに数えることもできようか。

一方，同じ年の9月19日から10月6日にかけてその主要部分が執筆された『社会的地位』は，50歳を間近にひかえた作家が当時のローマ駐在フランス大使夫人サン・トレール公爵夫人にいだいた恋心を核にすえて展開される小説だが，「恋愛」と「老い」という自身の現実問題にふかくむすびついた2つの主題をあつかいながらも，『赤と黒』執筆以来遠ざかっていた創作のよろこびをもたらすものであった。そのような執筆の背景にかんして，われわれは『エゴチスムの回想』での自己認識がみずからの問題の客観的な検討を可能にした結果であると考察した。したがって，アブルッツォ地方への旅行，「シエナの全戦闘」と出来事が重なるうちに執筆が難航，というよりもむしろほとんど顧みられなくなってしまうのは，恋の再燃という生々しい現実の渦中にあってみれば，もはや自分自身をモデルにした主人公の心理を作者の視点から冷静に検討することができなくなってしまったからではないかと考える。『社会的地位』のテキストに読みとれる主人公の内面のえがかれ方は図式的な感がぬぐわれないのだが，このことは，1832年12月12日，つまり「シエナの全戦闘」のあとでジウリアの心を読みあぐんでいた頃に，主人公ロワザンについて「美化されたドミニック（Dominique idéalisé）〔ドミニックはスタンダールの偽名〕」であると草稿の余白にしるした作家本人がもっともよく気づいていたものと思われる[47]。

註

1）拙論「感受性と自己認識――スタンダール『エゴチスムの回想』管見」，『ステラ』第14号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1995年3月，69–82頁，ならびに「『エゴチスムの回想』と『社会的地位』」，『文學研究』第93輯，九州大学文学部，1996年3月，99–118頁を参照されたい。

2）Stendhal, *Journal 1818-1842*, in *Œuvres intimes II*, édition établie par Victor Del Litto. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1982, p. 118. 後の1840年スタンダールはジウリアとの関係を回想し，「1827年2月3日，ジウリアとの和解。この恋のほんとうのはじまり」というメモを書いている（*ibid.*, p. 405）。

3）*Ibid.*, pp. 88 et 1057.

4）アンリ・マルチノは，彼女が作家の関心を引くようになるのは1830年からだとし

ている。Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*. Paris: Le Divan, 1950, pp. 228–229.

5) STENDHAL, *ibid.*, p. 124.

6) *Ibid.*, pp. 126 et 1077.

7) スタンダールは『アンリ・ブリュラールの生涯』第2章で7月革命のさなかベルリンギエーリ邸で一夜をあかしたことをほのめかしている。

8) ジウリアの存在は，アルベルト・ド・リュバンプレやマリー・ド・ヌーヴィルなどと共にマチルド・ド・ラ・モールの性格創造にすくなからぬ影響をあたえた。Voir Henri MARTINEAU, *Le Cœur de Stendhal. Histoire de sa vie et de ses sentiments, II*. Paris: Albin Michel, 1953, pp. 172–175.

9) Voir STENDHAL, *Correspondance II*, 1821–1834. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1967, p. 857; et aussi Henri MARTINEAU, *Le Cœur de Stendhal II*, op. cit., pp. 188–191 (cf. Luigi-Foscolo BENEDETTO, *Indiscrétion sur Giulia*. Paris: Le Divan, 1934).

10) STENDHAL, *Journal II*, op. cit. p. 181.

11) ヴィクトル・デル・リットによると，たとえば1831年は27日，1832年は39日しかスタンダールはチヴィタ＝ヴェッキアに滞在していない。以後も同様で領事在職中の9年間の滞在日数のおおよその総計はわずか530日である。Voir Victor DEL LITTO, «Présentation» in *Correspondance inédite de Stendhal, consul de France dans les États Romains*. Établissement du texte, préface et notes de V. DEL LITTO. Genève: Slatkine, 1994, pp. 24–25.

12) Voir François MICHEL, *Fichier stendhalien*, présenté par Jean FABRE, Victor DEL LITTO et James F. MARSHALL. Boston: G. K. Hall & Co., 1964, tome II, pp. 199–200.

13) Voir Henri MARTINEAU, *Le Cœur de Stendhal II*, op. cit., p. 252.

14) Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, op. cit., pp. 266–267. スタンダールはリジマック・タヴェルニエに宛てた同年8月9日付の書簡のなかでこのシエナ訪問の日程を当初12日間と伝えていたが，パリオの祭りが終わるやすぐに予定を短縮しフィレンツェにむかったのは期待したジウリアの姿がなかったからだろうか（voir STENDHAL, *Correspondance inédite*, op. cit., p. 48)。なお，興味深いことにスタンダールはこの小旅行のことをタヴェルニエに秘密にするよう口止めしている。

15) STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 144. 1982年刊行プレイアッド版『日記』のなかではじめて公になったこのメモにかんして編者ヴィクトル・デル・リットは，「すでに確認したようにシエナは，当時この都市に住んでいたジウリア・リニエリを指す。〔…〕「戦争」という語についていえば，それはスタンダールの恋愛用語のなかに数えられる」と示唆するのみである（Victor DEL LITTO, «Notices, notes et variantes» in *Œuvres intimes II*, op. cit., p. 1086)。

16) 同年7月5日にスタンダールは友人ディ・フィオリ宛の書簡で，2枚のベアトリーチェ・チェンチの肖像画をローマから送り，1部をジウリアにわたすよう頼んでいる。しかし，2カ月後の9月14日付のディ・フィオリ宛書簡のなかで，問題の2枚の版画を受けとったのかどうかを尋ねている点から考えると，この間にジウリアとの接触がなかった可能性も考えられる。

17) Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, op. cit., p. 275. もちろん，マルチノが別の場所で述べているようにこれらの旅行ではジャーノ・ピエトロ・ヴィウスーをはじめとするフィレンツェ在住の友人たちを訪ねることも大きな目的であったと思われる（voir H. MARTINEAU, *Le Cœur de Stendhal II*, op. cit., pp. 261–264)。翌年の1832年スタンダールは2月19日付のヴィウスー宛の書簡のなかで「この夏わたしはあなたにお目にかかるつもりです。今わたしのまわりにない快適な雰囲気をシエナ，ルッカ，フィレンツェに求めに行くつもりです」と書いている（STENDHAL, *Correspondance II*, op. cit., p. 390)。

18) Voir Henri MARTINEAU, «Stendhal et la police de Florence», *Mercure de France*, 1933, pp. 350–369; et aussi Henri MARTINEAU, «Les Voyages à Sienne du consul Beyle», *Le Divan*, 1935, pp. 391–403.

19) Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, op. cit., p. 277.

20)「10月2日，リシュリユー街以来はじめて14ページ，しかも熱中して書いた。すなわち，はっきりと目を覚まして」というメモが『社会的地位』の草稿にのこされている。「リシュリユー街」とはスタンダールが『赤と黒』執筆の頃住んでいた住所である（STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 167)。1830年11月にパリをたって以来ずっと思うように創作ができずにいた作家の心境が窺い知れよう。また，『社会的地位』の草稿のべつの箇所には「この草稿のために［18]32年10月7日から20日にかけての旅行をした」という旨の記述がのこされている（STENDHAL, *Une position sociale*, in *Romans et nouvelles*. Texte établi, annoté et préfacé par Ernest ABRAVANEL. *Œuvres complètes* t. 38, Paris: Cercle du Bibliophile, 1971, p. 357)。ところで，ヴィクトル・デル・リット編纂『スタンダール未発表書簡集』のなかに，発信地，消印ともにローマとなっている1832年10月14日付のリジマック・タヴェルニエ宛の手紙がある（STENDHAL, *Correspondance inédite*, op. cit., pp. 109–110)。はたしてスタンダールは旅行の途中でローマに戻ることがあったのだろうか。もし事実がそうであれば『アンリ・ブリュラールの生涯』執筆開始日の問題がからむだけに重要である（cf. Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, op. cit., p. 277 n.)。あるいは，タベルニエに旅行を秘密にするために発信地を偽り，第3者に投函をゆだねたのであろうか。

21)「人生。さらなる働きかけが期待できないのなら，わたしはリトルにたいしてすべてを失うことになる」（STENDHAL, *Une position sociale*, op. cit., p. 381)。タヴェルニエ本『ローマ散策』の「リトルはわたしに年齢を犠牲にすると言ったが，侯爵夫人は別荘に招くまいとしてわたしにいっぱいくわせた」という同時期のメモ

と照らし合わせると，このときスタンダールは「リトル」と偽名で呼ぶ娘から2人の年齢のへだたりにもかかわらず求愛されたこと，しかし母親が娘の恋に反対していたことが推測できよう（STENDHAL *Journal*, op. cit., p. 169)。

22) Voir Yves du PARC, *Quand Stendhal relisait les Promenades dans Rome. Marginalia inédits*. Lausanne: Éditions du Grand Chêne, Coll. Stendhalienne 3, 1959, pp. 43–45.

23) Victor DEL LITTO, «Notices, notes et variantes» in *Œuvres intimes II*, op. cit., p. 1097. スタンダールが求婚を拒否した背景を，われわれはつぎのように考える。1834年3月28日のメモを読むと，財産に無頓着な娘の一面が強調的にかたられている点から，双方の資産がふつりあいな点が少なくとも問題として意識されていたのだろう（voir STENDHAL *Journal*, op. cit., p. 189)。すでにみたように，母親が娘の恋に好意的でない理由もそのあたりにあったのではなかろうか。おそらくスタンダールは母親の目には財産目当てと映っていたであろうし，また作家にたいして母親はそうしたニュアンスをあらわにしていたと思われる。このように文脈をとらえるならば，1833年5月13日のメモ「1833年5月13日，リ〔エチ〕の求め(demande)」は，彼女からの求婚を意味し，つづく15日のメモの「1833年5月15日，貪欲なまなざし（Yeux juifs)」は財産の違いにこだわる家族の存在，「幸福感。拒絶」は作家が拒絶によって矜持をまもった満足感と解せるのではなかろうか。すくなくともつぎにあげるメモと照らしあわせるかぎり，スタンダールが求婚し，拒否されて喜んでいるとは考えにくい。1840年10月16日，スタンダールは『パリ評論』第3号掲載のバルザックによる『パルムの僧院』の批評『ベール氏論』にかんして，「人生。1833年5月15日，拒絶による大きな喜び。わたしはローマで〔バルザックの〕論文を読んでいる。〔論文のあたえる〕この喜びを感じるために，そのことを考慮する必要がある」というメモを『パルムの僧院』の自家用本に記している（STENDHAL *Journal*, op. cit., p. 397)。ヴィクトル・デル・リットが指摘するように，バルザックの評論にたいしてスタンダールは手放しで感激したわけではなく，当初からある種の葛藤を内心いだいていたはずである（voir Victor DEL LITTO, «Préface» à *La Chartreuse de Parme*. Exemplaire interfolié Chaper. Préface, transcription et notes par V. DEL LITTO. Paris: Cercle du livre précieux, 1966, pp. 20–23)。したがって，このメモにおけるスタンダールの考えを図式的にしめすならば，自尊心をくすぐるという点で「Little」の求婚とバルザックの賞賛とが対応し，自身の信念・信条を通すという点で結婚の拒否とバルザックの忠告への不順が対応しているといえようか。

24) Voir Lysimaque TAVERNIER, *Lettere a Stendhal*, raccolte e illustrate da Rosa Chigo BEZZOLA. Fasano–Paris: Schena–Nizet, 1991, pp. 154–157.

25) この時期スタンダールはフィレンツェの友人サルヴァニョリに3通の書簡をたてつづけにだしているが（10月26日，10月29日，11月2日付)，2番目の手紙のなかで「たぶんこの冬，あなたにお目にかかるつもりです」（STENDHAL, *Correspon-*

dance II, op. cit., p. 483）とフィレンツェ行きが表明されている点から考えると，スタンダールは27日から29日のあいだにジウリアにかんする情報をえたのではないだろうか。

26）Voir Henri MARTINEAU, «Les Voyages à Sienne du consul Beyle», art. cité, pp. 397–402.

27）STENDHAL, *Journal*, op. cit., pp. 170 et 1098.

28）Voir Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, op. cit., p. 280.

29）*Idem*.

30）「シエナの全戦闘」，およびその前後の2人の状況にかんして近年の研究ではつぎのものが詳細な解釈をこころみている——Michel CROUZET, *Stendhal ou Monsieur Moi-même*. Paris: Flammarion, 1990, pp. 609–619; 松原雅典『スタンダール，愛の祝祭——「赤と黒」をつくった女たち』，みすず書房，1994年，280–284頁。

31）STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 173.

32）*Ibid.*, p. 169.

33）*Ibid.*, p. 178.

34）Voir Michel CROUZET, *op. cit.*, p. 613.

35）フランソワ・ミシェルによると，弁護士ジュゼッペ・フラカセッチはジウリアの父，アントニオの甥にあたり，1831年には彼女の義理の兄弟の故人略歴を作成している。Voir François MICHEL, *Fichier stendhalien*, op. cit., t. II, p. 123.

36）Voir Michel CROUZET, *op. cit.*, p. 612.

37）Voir *ibid.*, p. 614.

38）STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 177.

39）Voir *ibid.*, p. 178.

40）STENDHAL, *Correspondance II*, op. cit., pp. 1126–1127. この手紙についてプレイアッド版の編者がやはり「ジウリアがぼかしたことばで近くせまった結婚をつげた〈ピエトラ・サンタの致命的な手紙〉」と註を付しているように，手紙のなかで問題となっているのは「新しい恋人」ではなく「新しい婚約者」であると考えるべきであろう。カルロ・ビアンキ，ジウリオ・マルチニにかんしては，つぎの論文を参照——François MICHEL, «Les amours de Sienne» in *Études stendhaliennes*. Paris: Mercure de France, 1972, pp. 132–156.

41）STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 180.

42）STENDHAL, *Correspondance II*, op. cit., p. 511.

43）*Idem*.

44）Voir Michel CROUZET, *op. cit.*, p. 618.

45）STENDHAL, *Journal*, op. cit., p. 181.

46）スタンダールはつぎのようなジウリアのことばをメモにのこしている——「1830年2月3日にみられた奇妙な愛のことば。彼〔スタンダール〕の前にまっすぐに立ち，彼の頭を手でつつんで。「あなたが醜くって年をとっていることは以前から充

分承知しています。」そう言ってから彼に口づけ」(*ibid.*, pp. 125–126)。

47) Voir STENDHAL, *Une position sociale*, op. cit., p. 357.